

第十六章 覚醒に向かつて

覚醒、悟り、靈的成長についての観念は、われわれにとつて絶対に必要である。が、それらは危険な観念でもある。われわれの日常生活の安楽と安定にとつて危険なのだ。もしあなたが、「成功した鋭敏な不満家」のそれとして私が以下に述べる、一定の発達レベルに達したら、この危険を迎え入れるべきである。もしこのレベルに達していなかったら、これらの観念は価値はあるであろうが、しかしまた、以下に論じられる理由のため、かなり危険であるだろう。

発達課題

通常の人生というものは発達課題の連続である。幼児として出発し、はいはい歩きを覚え、それから立つて歩くこと、話すこと、腸や膀胱を制御すること、等々を覚えなければならない。とりわけ、自分を適切に表現できるように、言語の複雑さを把握しなければならない。自文化の基本的な諸価値を把握し、さしたる緊張なしに適切なことを充分に行ったり言ったりするため、それらを自分の精神構造へと統合し、自動化しなければならない。自分自身を親から分化させ、商売を覚え、みずからを養わなければならない。どのようにして交友関係を築き、ほどほどに満足のいく感情生活を持った方がいいかを覚えなければならない。われわれのほとんどは、連れ合いとの関わり方、親としてのあり方

を学ばなければならない。すべきことは山ほどあり、そしてわれわれの誰もそれを完璧にこなすことはできないが、しかしほとんどの人は、基本的な生活を送ることにほどよく成功している。

発達しそこないとしての病理

西洋心理学によって理解されている主要な病理形態は、これらの発達課題のこなしそこないに起因するものである。かくして、発達しそこないという見地からは、神経症患者は、共通の技能を覚えそこなつたか、またはなにか不適當な形で誤つて覚えた結果、友だちの作り方や、他の人々に取り巻かれて気持良く過ごす仕方や、仕事のもちこたえ方がわからないのである。あるいは、神経症患者は合意的現実コンセンサスを十分に内面化しそこない、合意的現実を反映するような仕方での自分の意識が自動的に機能するように、それを形成することができなつたのである。

精神病患者は、なおいつそう明らかに、これらの発達課題の一つまたはそれ以上、とりわけ合意的現実の内面化をしそこなつたか、または通常の技能に激しく干渉する他の機能様態を発達させた結果、今は内面的世界シミュレーション——非合意的現実——の中で生きており、残りのわれわれが世界をシミュレートしている仕方からあまりにもかけ離れているので、明らかに彼は、合意的意識が現実と呼んでいるものとの接触をはなだしく欠いているのである。そこで、成功した心理療法とは、

- (1) 共通の発達課題を把握または実践しそこなっている理由を見つけ出して、それらを取り除くこと、
- (2) および／または発達過程で習得されなかつた特定の技能を教えること、のなんらかの組み合わせとみなすことができる。

誰も、自分が通常の発達課題をこなしそなたとは思いたくない。けれども、もしあなたがこなしそなたなら、表向きその苦痛を軽減するための一つのやり方は、新しい見方をする事によって自分のこなしそなたを合理化することである。「私はこなしそなたなりなんかしていない。他の皆が偽って正しいと言っていることが間違いであり、まやかしであることを見抜き、それを超越してしまったのだ！」たとえば、もし人々と気持良く話し合うことができなければ、それは自分がいくつかの基本的な社交的技術を習得しなかつからではなく、他の人々がまやかしであるか、冷酷であるか、気配りが足りないからである。当然、優秀で繊細な存在たるあなたは、彼らに取り巻かれていると気持良くしてられないのだ！もしあなたが安定した勤めを維持することができなければ、それはあなたが一定の共通技能を欠いているか、あるいはそれらを用いようとしないからではなく、労働者たちを搾取し抑圧する資本主義制度が悪いのである！

この種の防衛的な見方にはしばしば多くの真実が含まれているという事実が、それらをなおいつそう強力にする。むろん、人々は、ある程度までまやかして、冷酷で、気配りが足りない。むろん、ほとんどの制度においても、労働者たちへのなんらかの搾取と抑圧がある。が、通常の人々は、驚くべき程度まで誠実で気配りすることができ、そうかと思うと、仕事をきちんとしようとしないうか、またはそうできないが故に失業する可能性がある。けれども、通常の人ほとんどは、人生をうまく過ごすことにほどほどに成功することができる。

覚醒についての観念の危険性

ここに、覚醒や悟りについての観念の危険性が入り込んで来る。あなたがさまざまな通常の発達課題をこなしそこなつた場合、これらの観念が、自分の欠陥に直面し、それらの是正に取り組むのを避けるための魅惑的でもっともらしい合理化を提供する。「私が通常の人々に取り囲まれていると気持ち良く感じないのは、まさにグルジェフが言つたとおり、彼らが眠っているからだ。だから、私のような繊細な魂の持ち主、求道者、がなぜ彼らと付き合わなければならぬのだ？」「私がどの勤めにも長く留まらないのは、愚かな文化適応のまやかしを見抜いているからだ。私は、腰を据えて愚かな労働者の境界に甘んじるといつた、凡庸で墮落した状態を超越しているのだ」。覚醒や悟りについての観念は、せいぜい、あなたがどのみち本当は変えるつもりもない、自分の状況についての心地好い白日夢をかきたてるだけである。最悪の場合、それらはあなたが持っているなげなしの社交的技能をも手放すことを助長し、自文化へのさらなる不適応に資する一因となる。

マズローの欲求階層

人間性心理学の創設者の一人であるアブラハム・マズローは、現代心理学は、病理の研究を重視し、然る後に、その所見からの投影に基づいて普通人についてのモデルを開発するという点で、非常に一面的であることに気づいた。彼は、人生を楽しみ、達成感を感じている、幸福で創造的な人々を研究した。この研究から彼は、とりわけ、欲求の階層という概念を開発した。創造性や真理性といっ

た、階層中のより高次の欲求が非常に重要になる前に、普通、より低次の欲求が適切に満たされる必要がある。たとえば、空腹の人は、もし自分の社会的なイメージを犠牲にすれば食べ物が手に入ら、それをあまり気にかけない。

マズローの欲求階層とは、高いほうから低いほうに、順に、以下のとおりである。

- ・ 自己実現
- ・ 自己評価
- ・ 愛と所属
- ・ 安全・安定欲求
- ・ 基本的な生理的欲求

この配列においては、「高」「低」はなんらの道徳的意味合いも帯びていない。空腹の人が食べ物欲しがることのどこにも「悪い」ことはないのである。

自己実現とは、自己達成を遂げ、自分のあらゆる潜在可能性および能力の全てを発見し、それらを最大限まで開発し、用いようとする、生得的な欲求のことである。不幸にして、そうできる人はごくわずかしかない。マズローの用語では、本書は自己実現についてのものである。あなたが合意的トランスから目覚めれば目覚めるほど、それだけあなたは自分のより高次の自己と潜在可能性を実現できるようになる。しかしながら、グルジェフの考えはマズローのそれをはるかに超えている。

欲求階層はダイナミックな配列である。なんらかのより高次の欲求レベルに達したら、その後はい

つもそこに留まるわけではない。聖人でさえ飢えるのである。あなたはまた、自分の低次の欲求が充分大事にされていない時でさえ、高次の欲求に関心を抱くことができる。時には、低次の欲求充足の欠如ゆえの苦しみがかえってあなたを駆り立てて、真剣に高次の欲求を考慮させる可能性がある。一般的には、——ただし重要な例外もあるが、——低次の欲求がほどよく満たされないと、単にますます低次の欲求によって心を乱されたり、あるいは高次の欲求と低次のそれを混同したりしがちになる。たとえば、第四の道開発グループに加わることは、もしあなたが本当にしようとしていることが、第二十二章で論じられるグループワークの問題の一つである、友だちを持ちたいという欲求を満たすことなら、意図とは逆の結果を招きかねない。けれども、自己実現が深まるにつれて、高次の欲求にかなうように生きることによって自分の時間とエネルギーのますます多くを使うようになる。

成功した鋭敏な不満家

第四の道は、「成功した鋭敏な不満家」と私が呼んでいる存在のレベルで始まるよう目論まれている。

成功した人とは、われわれの目的のために、自文化の通常の生活技能を程よく習得した人のことであると定義される。彼は、職を維持し、基本的な存続欲求や通常の幸福欲求を大事にし、友だちを作って交友関係を維持し、程ほどに満足のいく恋愛生活を持ち、もし望めば家族を養う、等々のことができる。彼は、通常の社会的規範にのっとって適切に行動することができる。

しかしながら、成功した不満家は、通常の生活で到達したほどほどの成功レベルに甘んじていな

い。何か、または多くのことがどこか間違っているのだ。これらのものが何であるともみなされるかは、成功した不満家の鋭敏さと発達レベルの関数である。

もし彼の合意的トランスのレベルが依然として深ければ、彼は、文化が提供する報いのより多く、こそが彼を満足させるものであるという約束を受け入れるかもしれない。これは非常によくある信念であり、文化それ自体によつて積極的に助長されるものである。それは人々を懸命に働くようにさせ続け、彼らの注意をより深い疑問からそらす。たとえば、金銭的に非常に恵まれているにもかかわらず、もつともつと多くの富を得るために死ぬまで働き続け、決してのんびりと生活を楽しもうとしない、そういう人の例をわれわれは数えきれないほど目にする。

文化の主流に対する反抗は、必ずしも合意的トランスが軽減したことを示すものではない。反抗の種子は文化それ自体の中に組み込まれているので、成功した不満家は自分が社会悪とみなすものに反抗し、その反抗に（通常の基準では）かなり成功するかもしれない。もちろん、正されることを必要としている悪いことが山ほどあるので、これはとても魅力的な道である。しかしながら、「改革者」や「アウトロー」や「反逆者」の類は、われわれの文化では「保守派」のそれとまさに同じくらいよく知られており、外面的な反抗は本人自身の合意的トランスについてのなんの深い疑いも起こさせないかもしれない。あなたは、社会的に「良い」と定められているものから、社会的に「悪い」と定められているものに同一化を切り換えるのだが、しかし依然として同一化の中で眠っているのである。と言つてもこれは、不正に反対したり、制度に反抗することが本当に人々を助けるもつとも効果的なやり方である場合に、そうすべきではないという意味ではない。しかし、覚醒すべく試みるという見地からは、同一化および合意的トランスのその他の側面を超越することなくそうすることは、依

然として機械的であり、われわれが覚醒するのを助ける代りに、かえってわれわれの眠りを強めてしまふかもしれない。第十三章における嘘についての議論を思い起こしていただきたい。物品、名声、力、成功、等々は、それ自体は覚醒への障害ではない。障害を生み出すのは、それらに対するわれわれの執着や、それらとの同一化なのである。

成功した（本書において焦点を当てた重要な点で）鋭敏な不満家は、成功した不満家一般と同様、正常であることに対して社会が約束した報い（尊敬、消費財、安定など）と反抗に対する報いを味わい、どちらの報いも心地好いかもしれないが、その一方でそれらは充分ではないことを見出したのである。何かきわめて重要なものが欠けている。敏感な不満家は、より多くの物質的所有物や社会的尊敬や反抗のロマンでは、この何かきわめて重要なものへの欲求は満たされまいだろうと実感しているのだ。

成功した鋭敏な不満家は、表向きはごく普通の生活をしているように思われるかもしれないし、あるいは、自文化のいくつかの側面に対して外面的に反抗したりするかもしれない。しかし、成功した不満家は、通常の事柄で成功できないが故の合理化として、外面的に反抗すべく強いられるわけではない。彼は成功できるのだ。もし彼が反抗するなら、それは強さからの反抗であって、弱さからのそれではない。彼は必ずしも裕福でも有名でもないが、しかしほどほどに暮らしている。もし彼が、文化的な基準では質素あるいは貧乏に見える生き方を選ぶなら、それは本物の選択であって、より多くのお金を稼ぐ能力がないわけではない。ここで大切なことは、われわれがほどよく安楽で安全であるために本当に必要とするものと、広告やそのさまざまな形の文化的圧力によって大きく膨れ上がったこれらの欲望とを区別することである。現実的な基準では安楽で幸福かもしれないものが、物欲がし

ばしば精神的な努力に取って代っている消費社会の基準では、貧しいと分類されてしまうかもしれない。

と言つてもこれは、成功した人の生活の全ての側面が満足がいくとか、内的な疑念や失望が決してないとか、全ての点で社会的基準に適合しているという意味ではない。もし、覚醒すべく試みる前に、通常のあらゆることで完璧になるまで待たなければならなかったら、あなたは長い時間待たなければならぬであろう！ どのみち、通常の生活レベルで完璧になることは不可能なので、あなたは永遠に待つことになるであろう。

実存的神経症

成功した不満家たちのことを心理学が認識し始めたのは、一九五十年代のことであつた。サイコセラピストたちは、通常の神経症患者——通常の発達課題の全てを習得しなかつたために幸福ではなかつた人々——を治療することが常であつた。彼らは「正常」になり、正常な人々のように適応し、人生を楽しめるようになりたかつたのである。それから、新種の患者——社会的な基準では成功しているのだが、しかしなお満足していない人々——が出現し始めた。典型的な不満はこんなふうかもしれない。「私は自分が働いている会社の副社長をしており、いつか社長になるかもしれない。お金はかなり稼いでいます。地元で尊敬されています。幸せな結婚生活を送っており、可愛い子どもたちがいまいます。家族で、年に二回、素晴らしい長期休暇を取ります。けれども私の人生は虚しい。何かこれ以上のものはないのでしょうか？」

セラピストたちは、そのような患者たちが、どのように暮らしたらいいかよりはむしろ人生の究極的な意味についての疑問と格闘していることを示すために、彼らのことを「実存的神経症患者」と呼んだ。しかし、この用語は、いかにセラピストたち自身が依然としてわれわれの文化の思い違いにとらわれているかを示した。通常の生活は充分ではないと感じることがなぜ「神経症的」だったのだろうか？ 今、われわれは、成功した不満家が不幸だったのは、彼らの精神的・霊的生活が空虚だったからだ、と認識できる。合意的トランスは、実は、生まれつき目覚める能力を持っている存在にとつては充分なものではないのだ。「実存的神経症」は、実際は、潜在的成長の健全な徴候なのである。

本書で提示された分析と実践は、鋭敏な不満家のためのものである。それらは、おそらくあなたの不満を増やし、いくつかの点で、日常生活からあなたを遠ざけるだろう。同時に、きわめて重大なことは、これらの観念と実践を、普通の人生課題のこなしそこないを合理化したり、他人に対して冷酷な、配慮のない仕打ちをするための口実として使わないということである。さもなければ、それらの可能性を誤り導き、あなたの思い違いを増してしまうだろうから。

私に気がかりなのは、あなた——親愛なる読者——が、今度は、自分が「成功した鋭敏な不満家」であるほど十分に成功しており、十分に鋭敏であるかどうかという疑問に過度にこだわってはいしないかということである。もしあなたがここまで読み進めてこられたのなら、多分あなたは十分に鋭敏であるが、しかしどれくらい多くの不完全さを持つことをあなたは許されるのだろうか？ 最低所得レベルは要求されるのだろうか？ 「正常で通っている（正常とみなされている）にもかかわらず時々あなたが抱く、あの実に気違いじみた考えや感情、あの周期的な自信喪失、等々についてはどうなのだろうか？

これについては道理をわきま、えていただきたい。もし通常の達成レベルであなたが機能できない点が多々あるなら、——本書中の観念のいくつかは、あなたが通常の機能レベルを改善するのを助けるかもしれないが、——覚醒に関するこれらの観念の追求にあまりにも強く集中する前に、多分、そうした問題に取り組むべきだろう。もしあなたが不満家なのだが、ほどほどに成功した不満家ではなければ、本書の目的は社会を超えることであるということを忘れて、社会が提供する報いのより多くを得るために、本書の目的を歪めてしまふ、紛れもない危険がある。それだからこそ、第四の道は成功した鋭敏な不満家のレベルで始まるよう目論まれているのである。

もし自信が持てないなら、これらの観念と実践を試し、何が起ころか見てみるようにしていただきたい。もしそれらがあなた自身およびあなたの愛する人々の面倒をあなたが見るのを助け、少なくとも通常の成功レベルで他の人々に対してきちんとあなたが振る舞う（そうするための通常の理由を必ずしも受け容れることなしに）のを助けるなら、その時には、それらは追求してみるだけの価値がある。あなたの合意的トランスのレベルが軽減し始めるなら、その分だけ結構である。

真面目さと秘密の厳守

本節で提示されるさまざまな実践は、真面目な、献身的な学徒のために目論まれたものであった（現在でもそうである）。そのいくつかは、元々、内々の師弟関係においてのみ授けられた。より劇的な言い方をすれば、それらは「秘密の修行」であった。なぜか？

真の成長のための実践が秘密とされる主な理由は二つある。まず第一に、任意の実践はきわめて強

力な効果を生み出すことができるかもしれないので、それらの効果への準備ができていないと、それはあなたまたは他の人々を傷つけかねない。それらへの準備ができていない者の思いのままになると、それらの実践は危険なものになるのである。

私が提示する実践のどれも明らかに危険ではないが、しかしそれらは強力である。それらの結果として導かれる洞察のいくつかは狼狽させる可能性がある——どのような成長のための技法にも付きものの危険性——が、それらが及ぼす効果は長期的には有益なはずである。狼狽の程度はまた、あなたの現在の成熟レベルにかかっている。だからこそ私は、前述のように、覚醒に取りかかる前に、通常の発達課題をほどほどにこなせるようになっておくべきだと強調したのである。もしあなたが、自分が認めたくない、自身の中のさまざまなものに対する多くの防衛を持っているなら、自己観察によって得られる洞察は狼狽させるものになりうるので、集中的なワークに急いで取りかかるよりはむしろ、自分にふさわしいペースでゆっくりとワークしたいと思うかもしれない。もしあなたがひどく動揺した状態にいる場合、および／または日常生活を切り抜けるために心理療法的な世話や精神安定剤に頼っている場合は、合意的現実の中での適切な機能レベルを身につけるまで、これらのエクササイズを集中的に実践しないようお薦めする。ただし、「適切な」という言葉を、超自我スーパーエゴが多分あなたに要求するであろう、完璧な機能のレベルと解釈しないでいただきたい。現実の人間が果たしてそのレベルに到達しうるかどうか、私には疑問である。

これらの実践のいくつかが時々秘密にされてきた第二の理由は、あなたがどの程度容易に反応するか——根本的再教育を要求する上でそれらが持つかもしれない「衝撃値」——と関係がある。しばしの間、考えていただきたい。あなたは、今までに、あなた自身を改善するための技法をいくつかつぐらい

聞いたことがあるだろうか？

「いったい、そのうちのいくつを試してみただろうか？」

「実際に実践してみたもののうち、いくつを徹底的にやり抜いただろうか？」

われわれのほとんどは、やってみるべきだと思つたがしかし決して実行しなかつた自己改善の實踐の事を聞いてきた。そしてその他の、われわれがちよつともてあそび、そしてめざましいことが何も起きないのを見て、数回試しただけでやめてしまつた實踐もある。心理的には、これは(1)それら成長のための實踐をみくびる、暗黙の(そして多分公然の)態度を生み(2)それらは掃いて捨てるほどあり、ありきたりだ」「それらについて私はすでに知っている。すでに知っていることなどに興味はない」、(2)成長のための實踐を失敗と結びつけ(「もうそれはやってみたが、効果はなかつた」)、そして(3)新しい實踐へのわれわれの感受性、ならびに起こりうる反応と専念を鈍らせ(「これは私がすでに知っているたくさんのことへのほんの付け足しに過ぎず、どのみち効果なんかありはしない」)てきた。

秘密厳守の役割

秘密厳守はこれらの問題を扱う有用なやり方である。もしほとんどの技法が秘密であつたら、一度も実際に試したことがない実に多くの技法についての知識によつて鈍らされることも、いくつかをいかげんに試したことからくる多くの失敗経験の残滓によつて引き起こされる態度を取つたりすることもないだろう。新しい成長技法の伝授は、今よりもはるかに多くの注意をあなたに喚起させるであろう。さらに、秘密厳守の誓いをさせられることの「魅力」は言うまでもなく、もしあなたが自分に

明かされる技法を伝授されるに値することを証明しなければならなかったとしたら、なおのこと多くの注意がその技法に払われることであろう。それはより多くの意外性の価値を持ち、より多くの注意を惹き付ける衝撃を与えるであろう。その結果、あなたはその技法の実践に多量のエネルギーと注意を払うようになり、あなたが影響を及ぼされる可能性がずっと大きくなるだろう。ほとんどの成長のための実践には、昔からの規則が当てはまる——もしあなたが精進すれば、それは効果がある。

けれども、過去二十年間は激変の時代であった。靈的な道の「秘密の」技法の多くが、今や、あなたの最寄りの書店でペーパーバック版で入手できる。われわれはあまりにも多くの技法を知ることによる感受性の鈍化や、そのことが新しい技法に適切に反応するのをますます困難にする公算に対処しなければならぬ。これはいくつかの点では好都合である。たとえば、秘密厳守は、成長によりも力や魅力により多く関心があるわれわれの心の一部に訴えていたので、今やわれわれのその部分が煽られることが少なくなっている。

新しい成長技法に接する際の成熟したアプローチは、われわれはたくさんの技法に接してきたが、しかしそれらを実践せずに来たという事実を完全に受け容れることから出発しなければならぬ。もちろん、超自我の攻撃を受けやすくなる。「これらのことはおまえのためになることだったのだから、それらをやってみるべきだったのだ。おまえは無精者で、けしからん奴だ」。超自我の攻撃に余分なエネルギーをさく必要はない。事実、以前論じたように、自分自身をもっと知るために、あなたはそれを観察してみることができ。大切なことは、あなたの過去の現実を受け容れることである。同様に、あなたは、多分、あまりにもいいかげんなやり方でいくつかの成長技法を試したので、それらは効果を発揮する機会をあまり持たず、したがってあなたがそれらから多くを得なかったとし

でも意外ではない、という事実を受け容れること。済んだことは、済んだことである。さて、今や本当の問題はこうである。あなたは新しい成長技法とどう係わりとうとしているのだろうか？

焦点を絞る必要性

現実的に言つて、何であれ今後あなたが接するであろう成長技法のほとんどあなたはあまり関係することは無い、ということを確認すべきである。一つには、今われわれが持つている技法ですてに手いっぱいだとすれば、それらの多くに取り組むのに十分な時間がないからである。さらには、技法のいくつかは実践として矛盾した方向に向かうので、それらを結びつけることができないからである。たとえば、マントラの反唱に集中することによつて生み出される超越的感覚を味わうべく努めながら、同時に、ある種の高められた「今ここ」の気づきを実践することは困難である。

あなたは、注ぐための限られた注意とエネルギーしか持つていないのだから、本当にあなたに訴えるいくつかの特定の成長技法に焦点を絞り、それがあなたに効果を及ぼす機会を持つのに十分なだけの長さの期間、一意専心してそれを実践すべく決心しなければならぬ。当然、そのような確約をする前に、さまざまな技法や方式をもてあそんで、まずそれらについてのなんらかの体験的感触を得るべく試みるであろうが、しかしいつたん実践又は自分向きだと決心したら、長期間、たとえば、数カ月間それだけを実践することをあなた自身に確約し、それからそれを実行していただきたい。

これは、本書中の技法にあなたがアプローチする際に取るべき態度である。もしそれらがあなたに訴えるなら、それらを少々もてあそんで、それらの感触をつかむようにしていただきたい。実際私

は、覚醒すべく努めることによってあなたが自分自身で見出すまで、合意的トランスの中のわれわれの眠りの状態について述べた私の所説を信じないようにはしていただきたい。これは、さまざまな観念や技法についてあなたがつかむ必要がある、そういう種類の体験的感触である。あなたはもてあそんでいるのであって、真面目にワークしているのではない、ということに気づくようにしていただきたい。これを心得た上で、それらからなんらかの、ただし少しもはなばなしくはない結果を期待することが現実的である。

仮にほとんど何も起きないとしよう。もしあなたの技法の実践とそれによってあなたがする体験があまり満足がかなかつたら、それらについて決して忘れないようにする。それらはあなたにさほど訴えないこと、で、あなたはそれらを意図的にやめようとしているのだということを、あなた自身に意識的に言い聞かせるようにする。それによってすっきりした中断、すっきりした終了がもたらされる。あなたにはまだそれらを適切に行う準備ができていなかったのかもしれない。が、もしあなたがもつと真面目な態度でそれらに戻ることに決心すれば、「誰でもそんなことは知っている！」的態度と失敗に結びついている、あの、試みられなかったか、いいかげんに試みられた実践の山に十把一からげに分類されてしまえば失われるであろう、それらの実践の潜在可能性の幾分かは失われずにすむのである。

実践への意識的な確約

もしあなたがなんらかの最初の体験後、これらの観念や実践があなたに訴えることに気づいたら、

数カ月間、集中的に、一意専心してそれらを行うための意識的確約をするよう提案させていただく。書面で、あなた自身や友人への手紙で確約することは、あなたの確約を強固にし、それについての真面目さを実感する良いやり方である。どれくらいの時間（期間）真面目なワークに専念するか、明記されるべきである。あなたのように実践に関心がある友人と行を共にすること、さもなければ、研究グループを作るとか、第四の道のワーク・グループに参加するといった、この種の実践を行っている他の人々と交際することを考慮したいと思うかもしれない。こうした確約については、以下の数章中で詳しく検討してみたい。

自己観察についての議論を始める前に、本章への注を付しておきたい。私はこれまでに何度か真面目、という言葉を聞いたが、これは、覚醒を可能にするためには、それへの深い願いが重要だからである。けれども、われわれの文化は、「真面目」、「精神的・靈的」、「陰気」、「興ざまし」という観念間のあまりにも強い連想を抱いている。われわれは光を求めているのであり、しばしば真面目でなければならぬことは確かだが、その一方でわれわれはまた楽天的であることができなければならない。たとえ、より多くの気づきを持つことが、時としてあなたが本当の苦しみに気づき、あなたをそれに感情移入させるとしても、本質的な喜びは陰気なものではない。あなた自身およびあなたの目標を真に受け、が、いつもあなた自身およびあなたの目標を笑う力を培い、そしてその笑いを楽しみなさい。グルジェフは、人々にショックを与えて過度の真面目さから引き出すためにユーモアを用い、ひどく下品な振る舞いをする名人であった。時として、あなたの偽りの人格構造のなんらかの「問題」に対する最良の解決策は、いかにそれが滑稽なものかを見ることができることである。どのような霊的な道においても、ユーモアは必要不可欠なのである。

【原注】

(1) これは、精神病理についてのあまりにも限定的な見方である。

第十七章 自己観察

数十年來使われることはなかったのだが、しかし非常に興味深い、自動式定期旅客機という機械があった。

航行用の電子計器が開発されるにつれて、飛行機が厳密にどこにいるかについてのますます正確な電子的位置決定を刻々に行うことができるようになった。あなたは、自分がどの町の上空にいるか、目的地までの距離はどのくらいか、等々を知ることができるようになったのである。現在の人工衛星航行システムは、国内のどこにいても五十フィート以内の誤差でああなたの位置を特定することが可能である。これに加えられたのが、濃霧やその他の状態で滑走路を見ることができなくなった時に、パイロットが「計器だけで」着陸することを可能にする電子計器であった。電子標識が精確な位置決定を可能にした——あなたは滑走路の両側および両端からどれくらい離れているか、上空何フィートの所にいるか、等々。

それと同時に、機上で制御装置を電子的に操作し、高度や速度を調整したり、車輪を上げたり下げたりする等々の精確な方法が開発された。

やがてついに、これらの計器と制御装置が一まとめにされた。目的地のデータを旅客機の制御コンピュータに入力しさえすれば、後は椅子に深々と坐って見守っているだけでいい、あるいは飛行機を降りてしまってもいいのだ。設定された出発時間に飛行機はエンジンを始動させ、滑走路まで移動

し、離陸し、その目的地へと飛行し、途中、風や天候の変化に合わせて補正を行い、着陸し、そして空港へと移動する。飛行中、人間の手が制御装置に触れることは全くない。そのようなシステムが、単に理論上でだけではなく、また実地にテストされたのである。もちろん、最初の数機はいくつかの欠陥があり、途中でパイロットの介入が必要だったが、しかし非常に信頼性が向上した。人間のパイロットがすることが何もなくなくなったのである。

あなたは、完全に自動化された旅客機に乗りたいたらどうか？

全自動式旅客機の技術を持つてからしばらく経っているにもかかわらず、その定期便を運行させていないのだから、われわれのほとんどがそれに乗って飛びたいと思っていないことは明らかである。一つの失敗が重傷、おそらくは死亡に結びつく可能性がある以上、完全な自動操縦など信頼できないのである。制御装置のそばに坐り、機械類になんらかの故障が起きたら直ちに操縦を引き継ぐ用意ができた、人間のパイロット（および副パイロット）を望んでいるのだ。制御機器がいかに高度だろうと、たとえそれがほとんど常に信頼できようと、それでは充分ではないのだ。

自動旅客機としてのわれわれの心

われわれの意識がどのように自動化され条件づけられるかについての以前の数章での議論から、われわれは類比を見ることができるといえる。われわれの身体、心、感情は、しばしば全自動旅客機と似ている。進路と目的地は他の人々によって設定されてきており、自動メカニズムは設定済みであり、旅にはあなたの意識は必要とされない。